

【書評と紹介】

小岩信行・高橋堅太郎
四宮俊之・工藤 堯 著

『青森県の百年』

斎藤 康 司

一般教養書としての青森県近現代の通史が欲しいというのは、県民が長年待望していたことだと思う。物語や事件をつないで、近代青森県を浮彫りにしようという試みは、これまでに幾度かなされ、それなりに成功したものもある。しかし通史となるとなかなか容易でない。待望にもかかわらず実現はまだまだ先のこと、というのが私の見当であった。

ところが突如——と私には思われた——本書が現われた。私はさっそく買って一読した。そして、まさに待望の本が出現したと実感した。通史の条件である、あらゆる分野への目配りがしてあること、特に漁業部門に正当な場を与えていること、驚くべき多量の文献資料に当り、特に「青森県統計書」の数字を活用して、実証に努めていること、そして通史ながら著者たち自身の研究成果と思われるものもあって、専門分野の研究者に刺戟を与えるに違いないこと、等によって、そう感じたのである。

このような共同著作は五年くらいの時間は必要である。著者たちはそれを三年足らずで成しとげたらしい。苦勞のほどが偲ばれる。

二

本書は次の七章から成る。常識的時代区分ではあるが、その表現には著者たちの史観が垣間見られる。即ち次のとおりである。(一)内は評者。

- 一、明治の“新政”と青森県（明治前期）
- 二、明治後期の青森県
- 三、大正期の青森県
- 四、昭和史のはじまりと青森県（昭和初期）
- 五、戦争の時代（昭和戦前戦中）
- 六、戦後の青森県（三十年代前半まで）
- 七、高度成長の時代を経て

一章（便宜上こう表記する、以下同）は明治政府の“新政”が、果して人民が期待した“夜明け”であったのかを問い、二章は日清日露の両戦争に象徴されるこの時代が、本県に何をもたらしたかを糺し、三章では成り金と大正デモクラシーで表現されるこの時代に、本県が乗れたものと乗れなかったものを明らかにしている。四章は経済恐慌下での本県の冷害凶作から説き起して、それがまさに「昭和史のはじまり」にはかならなかった重い事実を叙述する。そして遂に戦争に突入してしまった運命の下での、困苦する青森県の姿が五章である。六章では戦後の復興

期から安定期にかけて、新しい地方自治体としての本県の、曲折の多い歩みを明らかにし、七章で世界史にも稀れな経済の高度成長が、北奥の地に何をもたらし、本県がどのように対応したか、冷厳な問い直しをしている。

以上のような観点と叙述の基調を、序説ともいえるべき「近代の横顔―本州北端地域の生活史」はおおよそ次のように明らかにしている。

多彩な本県の風土は、ゆたかな文芸を生み出して来た。しかし主要産業である農業は、しばしばやませと豪雪に襲われて、出稼ぎ収入に依存することが大きく、今もそのことに変りはない。農業技術は向上したがその生産額は製造業や建設業にも及ばない。そのため「青森県は戦後一貫して、国の開発計画と呼応しつつ総合開発計画や長期総合計画を策定し、工業化を中心とした経済開発をおこなおうとし、工業用地の造成や企業誘致につとめてきたが、懸案は今日にもちこざれている。むつ小川原開発計画もその例にもれず、国・県が主導する計画であり、帰趨は今後にもちこざれている。」いっ方、本州最北端で三方海に囲まれているという地理的条件から、軍事的基地に運命づけられており、函館戦争以来「北方の要衝としての条件は、今日でも青森県を規定しつづけている。」

これはかなり刺戟的な基調報告である。つまり近代青森県は負（ネガティブ）の存在で、それを逆手にとったのが文学や絵画や民俗芸能であり、逆手にとられたのが軍事基地である、ということであろう。

三

基調はそうに違いないが、著者たちは被害史を書こうというのではない。負の存在に違いないが、県民の創造と勤勉がさまざまな花を咲かせ実を結んだことも確かで、著者たちはそのことを正しくとらえようとしている。明治前期でいえば、四県併合による青森県の成立・広沢安任の開牧・東奥義塾の開学・「北斗新聞」「青森新聞」の創刊等は、県民が主体的に敏速に時代の動向に対応したものであった。明治後期は第八師団と大湊要港部の設置が局所的に活性をもたらしただけでなく、文化への影響をもたらし、なによりも交通・通信の発達を見た。

大正期には経済成長の余波と大正文化が、本県にも新しい教育運動や文芸運動を起すことになる。政治的意識もようやく民衆のものとなって労働運動が起り、農民組合も結成されるに至った。昭和戦前戦中は貧困と強権による統制で県民は窒息しかけるが、それでも教育界では綴方運動や新興教育運動といった抵抗が見られ、戦時体制の要求から青森青年師範学校・青森医学専門学校の開設という、高等教育拡充の奇貨が見られた。

戦後、占領軍司令官マッカーサー元帥は、その絶対的権力で日本の民主化政策を断行した。その真の意図はどうあれ、県民の多くはそれを歓迎し、将来への明るい希望をもった。もちろん食糧難と強制供出や農地改革をめぐるトラブルもあったが、農民の過半を占める小作農民が土地所有者になったことと、教師が労働組合を結成して待遇改善を要求した

ことが、具体的に新しい時代の到来を告げるものとなった。

本県自体の未来についても、豊かな自然と水資源、三方海に面する地理的環境、そして勤勉な労働力によって、新しい時代の主役に踊り出ることのように謳いあげられた。しかし経済成長の大渦巻きの中で気がついて見れば依然たる後進県である。著者の一人はこう書く。

「ハむつ製鉄Vやハフジ製糖Vの頓挫などに見られる政府などの政治的構想が先行した開発に地元がハ見返りVを期待してあいのりし、開発の強行による後遺症だけがもつぱらもちこまれてくるパターンの繰り返しは、県民の開発行政への不信をよびおこした。だが、こうした開発のパターンは、その後の下北地方を舞台にするハ原子力船むつ母港計画Vやハむつ小川原大規模工業開発計画Vハ核燃料再処理工場計画Vでも依然として繰りかえされているかに見える。」

また別の著者はこう書いている。

「多くの農家は表面的には幸福そうに見える。しかし、農業経営の将来はあかるい展望をみいだすことが困難であったり、負債償還のメドのたたない農家も少なくない。」

そしてまた教育関係を書いた著者はいい切っている。七戸中学校であった生徒の暴力による教師の死亡事件、野辺地中学校であったいじめによる生徒の自殺事件等は「社会状況の変化もあるが、管理強化、テスト体制化した学校から生じた問題である」と。

結局、本書は負（ネガティブ）の存在としての青森県はどうすればいいのか、鋭く県民に問いかけているのである。

四

次に私の批判を書きたい。短時間に、しかも僅か三百頁に収めなければならぬという制約が、著者たちにとってどのようなものであったか、ということには私にも想像できる。多少のミスや言及すべきでそれができなかったことは、著者たちが一番気にしていることに違いないから、そんなことは書かない。しかし本書が青森県近現代史の金字塔にまちがいないとして、歴史書の宿命からいえばようやく辿りついた一里塚でもあるといえよう。そういうことから二点だけ私見を書くことを許していただきたい。

第一点は、極端な中央集権国家日本の最遠隔地青森県という著者たちの視点を、もっと強く太く貫ぬいてはしかったということである。

明治日本は急激な近代化のため中央集権体制をとらねばならなかった。しかし真に近代国家であるためには、主権在民でなければならず、地方に自治権が与えられねばならなかったのである。けれども国民の主体性でそれをかちとることはできなかった。敗戦による占領軍の政策として初めて国民主権と地方自治権が与えられた。日本国憲法は第八章の四カ条を地方自治に当てているのである。

しかし戦後の歴史は地方から自治権と活力（ポテンシャルエネルギー）を奪うばかりの政治が行われてきたことを教えている。それが保守長期政権によってとられてきた政策であることはいうまでもない。自由と民主の申し子のように装い、マッカーサー改革の正統な継承者であるはず

の政党が、なぜ地方自治の空洞化を図るのか。それが政権を長期に維持する最適の方法だからである。このことをキーワードにすれば、著者たちの叙述と問題提起はもつとわかりやすく精彩に富むものとなったのではあるまいか。そして「中央直結」を誇らしげに唱えて、地方の権利と主体性を自ら放棄した人びとが、実は何一つその成果らしいものを示せないことを、例えば旧憲法下における竹内清明の業績と対比して見せることができたはずである。

「私説知事」と呼ばれた竹内清明が、政友会総裁原敬と結んで港湾修築・道路改修・学校設立等驚くべき社会資本充実を成し遂げたことは特筆に値する。私は原と竹内の結託をよしとするのではない。どこかが得をすればどこかが損するのが、中央に対する地方の宿命であった。私がいいたいのは地方の主体において中央を動かしたということである。ただ中央に依存するだけでは、習性となって地方独自の発想を失ってしまふ。例えば本書も書いている四六米づくり運動が「二万町歩開田」という唄い文句と共に始ったのが昭和四十二年である。これはしかし早い県からは数年も、遅い県からでも二、三年遅れていた。だから怒涛のような開田が行われ、その生産が安定する四十五年には早くも試験的減反、四十六年には本格的減反という現実には直面せねばならなかった。米の品質でもそうである。国の試験場で耐冷性品種を育成し、これで米の増産に大きく寄与したまではよかったが、品質が問われる過剰時代には対応ができず、隣県の岩手・秋田にも遅れをとっている仕末である。本書がせつかく六章に「地方自治制度の変化」という一節をもちながら、県内の選挙と市町村合併と地方政界の動向だけに終始し、ありうべき中央政

権との緊張関係を無視したのは残念である。

第二点は、今日的価値判断から旧日本の大勢に抗した少数派の存在を過大に評価したきらいがないか、ということである。少数派が正しく後世につながり、これを導く存在である限り、たとえ微小な存在であろうと歴史に刻むことは、むしろ歴史家の使命である。しかし少数派を正當に評価するには、大勢の実態も正確に記されていなければならない。そんな釈迦に説法をなせるのか。次に二、三例示したい。

本書は「北斗新聞」と「青森新聞」を評論新聞と呼び「政府批判の論鋒がするどく」、弾圧をうけたとしている。一般に明治十年代の新聞を大新聞とか評論新聞と呼んで、二十年代に始まる商業新聞（小新聞）と区別するので、この記述は誤りではない。また発禁処分にあった号が残っているわけもないので、現存するものに論鋒するどいものを発見できないのも当然かも知れない。しかし著者がのちの商業紙としての「東奥日報」——それとて旧自由民権派の評論紙の性格をもっていた——と区別するほど両紙に評論が多いわけではない。雑報その他の方が多いし「青森新聞」の如きはいかがわしい風聞を載せて、後日取消するという不見識を再三くりかえしている。自由民権思想の残り香をかぎとるのがむしろ困難なくらいである。陸奥（のちの羯南）がどのような役割を果たしたのか、のちの大新聞人の片鱗でも読みとれるかとなると、全部を丹念に読んで也不可能ではないか。恐らく関係者の志はもつと高いものであったに違いないが、評論新聞といえども採算にのらなければならず、艶ダネなんかまで載せたのであろう。

本県出身作家の活動が「思想統制が広汎におこなわれた昭和期の八冬

の時代Vをむかえてもとまらなかった」というところがある。文脈からは統制に抵抗した人びとと読めるのだが、その人びとは佐藤紅緑・葛西善蔵・太宰治・石坂洋次郎・今官一のことである。果たしてこの五人をそのようにくくっていいのだろうか。仮りにそれがいいとして北村小松のような存在をどう評価するのだろうか。あの戦争を非なるものとして抵抗した人の存在は尊い。しかしそうでない人びとが大勢だったのが事実であり、その故にこそ少数派の存在が価値をもつのである。このあたりは著者の思いこみが少し強すぎはしないだろうか。

青森空襲や出征の叙述に、生き証人の証言を用いているのは本書の特色で、読者に歴史というものに親しませる効果をあげていると思う。空襲の悲惨さ出征兵士を送る母の嘆きはホンネで、だから読者の心をうつ。一部の指導者を除いて国民の大半のホンネはそんなものであったのかも知れない。しかし一步外へ出れば「撃ちてしまえ」「一億玉碎」のテーマだけが横行していたのである。そのテーマが本書には余り書かれていない。例えば、りんごの品種名でカタカナのものを敵性語として改名を主唱したのは、著者も書いているように「東奥日報」であった。島善鄰（ちか）元県農試技師（のち北海道大学々長）のような人も賛成で、一般公募で漢字名をつけた。いったい「東奥日報」はその頃どんな社説を掲げ、ニュース報道をしていたのであろうか。それは「東奥日報」がどうのこうのというのではなく、私も含めた大勢の戦前戦中派の姿を鏡にうつすことをさけては歴史にならないということなのである。

かつて岩波新書の「昭和史」が、帝国主義反対の動きを過大に評価し、それでも戦争に突入したのはどういうわけだ、という素朴な疑問を呼ん

だように、思いこみは歴史にとって危険である。自らの戒めでもあるので一言に及んだのである。

（山川出版社 一九八七年刊 四六判 本文二九六頁 一九〇〇円）

（弘前大学国史研究会会員）